歯の名称について

本間邦則

歯の名称として、切歯・犬歯・小臼歯・大臼歯の用語が用いられている。これらが、いつ頃、どのようにして用いられてきたかを知るために調査し、その一部については既に報告した。

歯の形態学にその生涯を捧げられた故藤田恒太郎教授は、その著『歯の解剖学』(一九六三)において「英語の incisor cuspid bicuspid molar なる呼称は John Hunter 氏の提唱したものであるという(山田平太)」と記載している。John Hunter (1728—1793) の著 A Natural History of the Human Teeth (1778) には詳細な歯の形態についての記載とともにその名称も付されている。しかし、近世の医学に大革新をもたらした Andreas Vesalius (1514—1564) の主著 De Humani Corporis Fabrica (1543) には、次のように述べられている。歯の形態について、中切歯は側切歯よりも大きいこと、犬歯の歯根はもっとも長大であること、小臼歯は上顎が復根、下顎が単根であること、大臼歯は上顎で三根、下顎は二根であることを記している。歯髄腔については、歯の栄養のためにあるという。また切歯 incisorii、犬歯 canini、臼歯 molares と呼称している。これらの名称は、近世歯科医学の祖といわれる Pierre Fauchard (1678—1761) の Le Chirurgien Dentiste, ou traite des dents. (1728) にも用いられている。

Andreas Vesalius の歯の形態に関する観察は正確であり、その命名法も現在の歯の名称の基礎をなしているものと推定される。

(日本歯科大学新潟歯学部)